

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 土方巽の暗黒舞踏における「なる」技法の意義
—身体表現の方法と思想の変遷に即して—

氏名 李 裁 仁

本論文は、土方巽の暗黒舞踏を取り上げ、その独自の技法である「なる」について考察するものである。暗黒舞踏とは、1950年代末から1960年代にかけて、土方巽（1928-86）によって創始された日本の新しいダンスである。土方の舞踏は、その最初の作品と知られる「禁色」（1959年）からして、男色行為を示唆するような身振りや、生きている鶏を絞め殺すなどといった行為的な動きをダンスとして舞台上に持ち込み、従来のダンスとはまったく異なるスタイルを示した。当時日本で主流を占めていたクラシックバレエや、ドイツのモダンダンスにおいては、ある典型的な動き方や諸技術、感情表現や物語の再現的な身振りなどが用いられてきたのに対し、土方は、シンプルで直接的な行為を選び、身体をオブジェとして扱い、舞台の上でマニフェストを読み上げるなど、既存のダンスに対する反乱とも言えるような舞台を作り出すことで、日本のダンス界における前衛時代を切り開いた。

土方は、実験的舞台を仕上げるにとどまらず、講演やインタビュー、雑誌連載などの活動を通じて多様な言説をも残した。土方の残した言説には、実際の舞台に相応するような、舞踏と舞踏する身体に関する彼独自の思想が読み取れる。舞踏研究者の多くは、このような土方の言説における様々な難解な言葉遣いを、舞踏を意味するメタファーとして捉え、土方独自の舞踏論として論じようとしている。このような言説は、従来のダンスにおいては存在しなかった姿勢や動き方を用いる舞踏の難解さを説く、新しい視点や解釈のための一つの重要な鍵として見なされ、現在まで多くの舞踏研究家たちに大変貴重な材料として扱われてきた。本論文においても土方の残した言説は、舞踏を理解するための重要な手がかりであり分析の対象となっており、それに基づき、彼独自のダンス観、身体観の意義を20世紀半ばのダンス歴史上に位置付けることを試みている。

このような舞踏作品や言説から推測できる土方の意図は、従来のダンスと身体に対する概念自体の転換への試みである。例えば、舞踏活動の初期の言説である「刑務所へ」において土方は、自らの舞踏について「無目的を誇示する行為」と述べ、表現の媒体として身体を使用してきた従来のダンスを拒む反舞踊としての新しいダンスに対する願望を書き込んでいる。

舞踏の作品や言説研究において興味深いのは、1960年代末から1970年代初頭に見られるスタイルの変化である。土方の舞踏は1960年代後半に入ると、その作品スタイルが変化し、以前には見られなかった東北的な要素、すなわち土方の故郷である秋田を想起させるような舞台装置、音響、動作などが舞台上に登場するようになる。この時期、舞踏作品のスタイル変化をもたらした重要な手がかりの一つとして、本論文では、土方の「なる」技法を取り上げる。

舞踏の研究においてしばしば言及されている「なる」とは、「あらゆるものに人間の肉体をメタモルフォーズ（変身）する」ことを意味する土方独自の動きの技法である。土方は、舞踏について「見せる＝見る関係じゃない」とし、「見せる舞踊は全面的に廃止せねばならない」と述べている。土方は、舞踏が、ある対象の表現の手段となり、対象を再現的に表現することよりは、ある特定の対象に「なる」ことを通じて、対象に身体的に関わり続ける状態それ自体をダンスとして表わそうとした。土方の「なる」技法は、従来のダンスにおける一般的な「表現」の枠組みに収まらないような特質を帯びるため、ダンスの表現に対する新しい視点を求める技法であると思われる。本論文は、舞踏における表現性の議論にまつわるこのような「なる」技法にとりわけ注目し、土方の意図した表現の独自性を見出すことを目指している。時代によって異なる舞踏のスタイルを、「なる」技法とともに検討することで、舞踏における「なる」技法とそれに伴う舞踏の表現性の変遷を明らかにしたい。

舞台芸術の中でとりわけダンスは、動きをその本質とするため、身体がもたらす様々な表現の諸特質を伴う芸術である。それゆえダンス史は身体表現のあり方の歴史といっても良い程、ダンスは表現の特質と密接に関わって発展して来た。本論文は、このようなダンスにおける身体表現の軌跡を背景とし、表現性の様々な様態を検討することで、1960年代から1980年代までの土方の舞踏における身体表現の独自性を見出すものである。土方の舞踏における「なる」技法をめぐる表現性について論じることで、舞踏の身体表現の独自性を改めてダンス史の中で如何なる意義を持つものとして位置付けられるのかを提示することを本論文の最終的な目的とする。

第一章では、土方の舞踏活動の初期として考えられる1950年代後半から1960年代初頭まで、舞踏土方が暗黒舞踏を創始するに至った経緯を明らかにし、初期活動における同時代文化人との交流関係と舞踏言説を検討することで、「なる」技法の誕生する以前の時期における舞踏スタイルについて考察する。

第二章では、「なる」技法が登場し始めたと思われる、1960年代半ばからの土方の舞踏活動について検討する。「なる」技法が土方の周りから議論になり始めたこの頃、実際の舞踏作品にもスタイルの変化が見られるようになる。このスタイルの変化というのは、初期の肉体に関する実験的な試みにとどまらず、舞踏作品における動きや舞台装置などに日本的な要素が取り入れられることで、土方独自の動きスタイルが現れるようになったということである。土方の舞踏における日本的な要素は、1963年の作品「あんま—愛欲を支える劇場の話」において初めて現れ、1968年の作品「土方巽と日本人—肉体の叛乱」以降の振り付けにおい

て、より頻繁に示されることになる。第二章では、「あんま」に始まり「肉体の叛乱」に至るまでの土方の制作活動と、それらの作品に対しての当時の評論などを検討することによって、「なる」技法の登場がもたらした動きのスタイルの変化への影響を考察する。

第三章では、1960年代後半から1970年代初頭にかけて示される舞踏の作品スタイルの変化に検討を加える。この時期における「なる」技法の確立にあたっては、特に土方の「舞踏譜」の登場が大きな役割を果たしたと考えられるため、本章では「舞踏譜」誕生の背景と特徴に注目する。この時期に登場し始めた舞踏譜に、いかなるイメージが貼られていて、いかなる言説が残されているのかに注目することで、この時期における「なる」技法の特徴と、土方が目指した表現性を検討することができる。舞踏譜の検討を通じ、振り付けの結果としての動きではなく、動きの作られるその過程を明らかにすることによって、その中での土方の発展させた創作における意図や舞踏思想の側面についても推測できる。

第四章では、「なる」技法の対象として、土方が特に注目していた「不具性」の身体について検討する。1970年代の初期、舞踏譜とともに確立されたと思われる「なる」技法は、後になって舞踏の代表的なイメージを決定づける思想的な基盤であり、振り付けにおける体系的な方法である「衰弱体」の思想を創造する上で大きな役割を果たしたといえよう。したがって、第四章では、不具性を持つ身体イメージと大きく関わっていた舞踏譜の登場を通じて1972年の作品に初めて舞台化された不具性を持つ身体の動きが、「なる」技法とのかかわりの中でどのように発展したのかを検討する。土方の1970年代前後の「不具性」に関わる言説や、舞台上の土方の不自由な身体に対する当時の評論家たちの評論に基づき、「不具性」を通じて土方が目指した動きに通底する思想を明らかにし、その意味付けを試みる。

第五章では、1970年代初頭から不具性を持つ身体になることを願いつつ土方が目指した東北的な舞台や日本人の身体に焦点を当て、「なる」技法と舞踏の「古典」を検討する。その時期に当時の舞踏評論家たちも、土方の舞踏における「東北」や「日本的」といった特徴に注目し、舞踏における「古典」について論じていた。第五章では、このような「東北」や「日本的」といった特徴を「なる」技法とともに検討することで、土方の目指した舞踏における「東北」、「日本」について考察する。1978年と1983年に二回行われた海外舞踏公演を通じて、より注目されるようになった舞踏における「古典」としての日本人の身体性の中に、「なる」技法が常に存在していた事実を明らかにし、前衛としての舞踏における特定の技法としての「なる」が持つ意味を明らかにすることが五章の目的である。

結論として、舞踏における「衰弱体」の思想や「東北」、「日本的」などといった特徴が「なる」技法とともに発展したものであることを示し、前衛ダンスとして始まった舞踏にとって「なる」という技法の確立が、従来のダンスにしばしば見られる表現の様式化・固定化を意味するのではなく、独自の舞踏思想の誕生を導いたということを主張する。